

【令和5年度実績】

1. ポストコロナにおける人文社会科学研究・教育の国際展開

「研究」

No.22 (3)-1 優秀な若手研究者の活躍促進, No.02 (1)-2 卓越した研究を基盤とした国際共同教育の深化

実績報告

I. 支倉リーグの拡大と強化

東北大学を起点とした人文社会科学の研究と教育のための国際的ネットワークである「支倉リーグ」について、2022年採択の「支倉宣言」に基づき、更なるネットワークの拡大と連携の強化を進めた。

2023年度には新たにケンブリッジ大学(イギリス)ワルシャワ大学(ポーランド)などの欧州の名門校、また地域的には新たに米国のジョージア大学やオーストラリアのカーティン大学が支倉リーグのメンバーに加わり、アフリカの大学(コートジボアール/アラサン・ワタラ大学)からも既に参加への賛同を得るなど、国際的な研究教育ネットワークとして存在感を強めている。

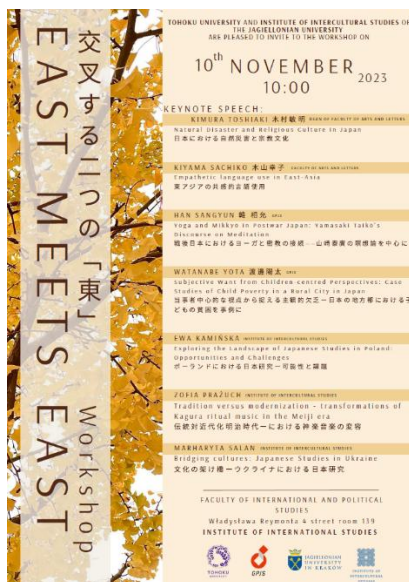


参加大学 (2023年11月現在)

- ① カーティン大学 (オーストラリア)
- ② ウィーン大学 (オーストリア)
- ③ ヘント大学 (ベルギー)
- ④ ルーヴァン・カトリック大学 (ベルギー)
- ⑤ プリティッシュコロンビア大学 (カナダ)
- ⑥ グルノーブル・アルプ大学 (フランス)
- ⑦ ハイデルベルク大学 (ドイツ)
- ⑧ ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 (イタリア)
- ⑨ ナポリ東洋大学 (イタリア)
- ⑩ ローマ大学ラ・サピエンツァ (イタリア)
- ⑪ ポローニャ大学 (イタリア)
- ⑫ フィレンツェ大学 (イタリア)
- ⑬ パドヴァ大学 (イタリア)
- ⑭ ライデン大学 (オランダ)
- ⑮ ユトレヒト大学 (オランダ)
- ⑯ オスロ大学 (ノルウェー)
- ⑰ ヤゲウォ大学 (ポーランド)
- ⑱ ワルシャワ大学 (ポーランド)
- ⑲ リスボン新大学 (ポルトガル)
- ⑳ モスクワ国立大学 (ロシア)
- ㉑ マドリード・アウトノマ大学 (スペイン)
- ㉒ グラナダ大学 (スペイン)
- ㉓ サラマンカ大学 (スペイン)
- ㉔ スtockホルム大学 (スウェーデン)
- ㉕ ローザンヌ大学 (スイス)
- ㉖ ケンブリッジ大学 (イギリス)
- ㉗ イーストアングリア大学 (イギリス)
- ㉘ シェフィールド大学 (イギリス)
- ㉙ ジョージア大学 (アメリカ合衆国)
- ㉚ 東北大学 (日本)

II.「支倉リーグ」ネットワークを活用した研究・教育の国際展開

11月にポーランド(ワルシャワ大学・ヤゲウォ大学[下図左上])、オーストラリア(カーティン大学)1月にイタリア(ローマ大学[下図右上])で両大学の学生や若手研究者を交えた国際ワークショップを開催した。また、日本学国際共同大学院の大学院生を主な対象とした支倉セミナーを6回、以下の機関から講師を招いて実施した。東北大学、レンヌ大学、ストックホルム大学、シカゴ大学[下図左下]、セーデルトーン大学[下図右下]、ヨーテボリ大学、ジョンズ・ホプキンス大学、ヴェルサイユ・バロック音楽研究所



2023年度 第4回 日本学国際研究クラスター研究会 第17回 支倉セミナー

The Sōseki Bunko as Research Commons: Rethinking Property in Modern Literature
研究の共有地としての漱石文庫—近代文学における「所有」の再考—

日時 2023年 11月30日 16:20~18:00
会場 東北大学大学院文学研究科棟 135教室

講師 **マイケル・ボータッシュ** Michael K. Bourdighs (シカゴ大学教授)

主簿: 東北大学日本学国際研究クラスター・日本学国際共同大学院 (GPSJ) | 共催: 東北大学総合日本学センター・東北大学附属図書館
問合せ: 東北大学 日本学国際共同大学院 支倉セミナー室
Email: gpsj[at]grp.tohoku.ac.jp *041を省略して添字してください。

第16回 支倉セミナー Hasekura Seminar

Disciples of Hell: The History of Satanism
— 地獄の使徒たち: サタニズムの歴史 —

日時 2023年 11月17日 16:30~18:00
会場 東北大学大学院国際文化研究科棟 101会議室

講師 **ペール・ファクスネルド** Per Faamel (Associate Professor, Södertörn University)

主簿: 東北大学日本学国際研究クラスター・日本学国際共同大学院 (GPSJ) | 共催: 東北大学大学院国際文化研究科
問合せ: 東北大学 日本学国際共同大学院 支倉セミナー室
Email: gpsj[at]grp.tohoku.ac.jp *041を省略して添字してください。

III. 統合日本学センター開設

2023年10月1日に、文学研究科がイニシアティブをとって統合日本学センターを開設した。日本学を専門とする外国人研究者の雇用、国内外の研究者との共同研究などにより国境やジェンダー、人文系・社会科学系・理工学系といった分野・方法論の壁を超えた「統合」により新しい人文知の形成と発信を目指す画期的な研究センターであり、東北大学の人文社会科学の国際的プレゼンスの強化の基盤となることが期待される。

東北大学統合日本学センター開設記念講演
Center for Integrated Japanese Studies Opening Lecture

人文・社会科学の未来 日本学の未来
The Future of the Social Sciences and Humanities
The Future of Japanese Studies

日時 2024年 3月5日 13:00~16:00
場所 東北大学片平さくらホール ハイブリッド
参加方法 対面・オンラインともにGoogle formで事前申し込み
3月1日まで <https://forms.gle/D6dPpDT8Rk9ymh6G>









講演者 **マイケル・ボータッシュ** Michael K. Bourdighs (シカゴ大学教授)

主簿: 東北大学 統合日本学センター
Center for Integrated Japanese Studies
連絡先: 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区5丁目27番1号
TEL.022-795-5244 E-mail:cjis@grp.tohoku.ac.jp

IV. 世界情勢を考慮した、国際的に責任ある研究機関としての貢献

2022年8月に、客員研究員として受け入れた、ウクライナ、オレシ・ホンチャール記念ドニプロ国立大学のクラヴェツ・マリア講師が、2023年4月に、文学研究科大学院の後期課程の学生として入学し、ウクライナからの避難学生として、本学から、学生寄宿舍の寄宿料、入学料、授業料の免除等の支援を受けて、日本学専攻日本文学専攻分野に所属し、日本の近現代文学を主な対象とした研究を旺盛に推進している。また本学のウクライナ支援事業においても活躍をしていただいている。[下 url 参照]

<https://www.ukrainesupport.shuyukai-tohoku-u.net/topics/20230502>

 [★hasekura_map_231120.png](#),  [★参加大学.png](#),  [★ワルシャワ大学.png](#),  [★支倉セミナー1.png](#),  [★統合日本学センターキックオフ.png](#),  [★ヤゲヴォ大学\(2\).png](#),  [★支倉セミナー2.png](#),  [★ローマ大学.png](#)

2. 国際化とダイバーシティ

「教育」

No.17(4)-2 オープンでボーダレスなキャンパスにおける国際共修の展開, No.25(4)-2 ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンを尊重する「共同参画」体制の構築

実績報告

I. 大学院博士課程後期3年の課程のIGSAL(国際大学院コース)の学生の受入れ開始

2023年10月に、2022年度に実施した、大学院博士課程後期3年の課程のIGSAL(国際大学院コース)の試験に合格した最初の入学生1名を受け入れた。これによって、文学研究科において、国際大学院コースの教育が本格的に始動することとなった。さらに、2023年度に実施した同コースの試験では4名が合格し、入学を承諾したことから、2024年10月には4名の入学生を迎えることが予定されており、同コースの教育も安定した軌道に入ろうとしている。

II. 大学間交流協定を結んでいる海外の大学との間の教育交流

1. 北京外国語大学日本語学院・東北大学文学研究科・吉林大学外国語学院 三校オンライン共同交流会の開催

2023年5月30日に、東北大学文学研究科と、中国の北京外国語大学日本語学院、吉林大学外国語学院の三校の学生と教員がオンラインにより参加する交流会を開催した。三大学から各12名の学生が参加し、発表やグループディスカッションを通して、互いの文化の共通点と相違点についての理解を深めることができた。また、学生交流を起点として比較文化研究を推進することに関して、三大学の教員等の間での意見交換も行った。東北大学とも縁の深い北京外国語大学、吉林大学の二校と、このような教育交流ができたことは、今後の国際交流の進展にとっても、たいへん重要な意味があった。

北京外国語大学日本語学院・東北大学文学研究科・吉林大学外国語学院
三校オンライン共同交流会

実施時間:
2023年5月30日 北京時間: 15:15-17:30

使用言語: 日本語

ZOOM ミーティングID: 614 129 6897

開始式:
1. 北京外国語大学日本語学院院长 張嘉桐 沈嘉輝 趙雲堯
北京日本学研究中心主任 周興夫教授ご挨拶
2. 東北大学文学研究科長 木村敏明教授ご挨拶
3. 吉林大学外国語学院副院長 唐穎副教授ご挨拶
司会: 吉林大学外国語学院 曾婷婷副教授

全体発表:
1. 北京外国語大学日本語学院 張嘉桐 沈嘉輝 趙雲堯
2. 東北大学文学研究科 石垣美晴
3. 吉林大学外国語学院 李 銳 尹安娜 趙可欣

交流活動:
司会: 東北大学 島崎薫副教授
北京外国語大学日本語学院 12名
東北大学文学研究科 12名
吉林大学外国語学院 12名

終了式:
司会: 北京外国語大学日本語学院 費曉東副院長
1. 東北大学文学研究科 浜田宏教授 コメント
2. 北京外国語大学日本語学院教学主任 魏然副教授 コメント
3. 吉林大学外国語学院日本語科主任 胡建軍教授 コメント
4. 東北大学文学研究科 安達宏昭教授 コメント

2. 南開大学外国語学院日本語学科からの日本語・日本文化研修プログラム生の受入れ

2023年7月6日～14日の9日間にわたり、一般財団法人東北多文化アカデミーとの共催により、中国の南開大学外国語学院日本語学科の学生9名を受け入れ、日本語・日本文化研修プログラムを実施した。この期間、研修生は、文学研究科の教員による特別講義を受講し、文学部の専門科目の聴講し、研究室訪問を行い、懇談会に出席し、研究成果報告会で発表をするなど、たいへん充実した学びの機会を持ち、その中で、東北大学の学生(留学生も含む)、教員との交流を深めた。東北大学との多くの交流実績のある南開大学の学生によるこの対面の研修プログラムは、2019年以前に実施していたが、新型コロナウイルスの感染流行の後に間をおかず、2023年の夏に早くもそれを復活させ、内容も豊かに行なえたことには、きわめて大きな意義があった。ポストコロナの国際交流を着実に展開する上での重要な起点になると期待される。



Ⅲ. 多様性に富んだ教育の展開

1. 業務委託制度の活用による国際教育の多様性の拡大

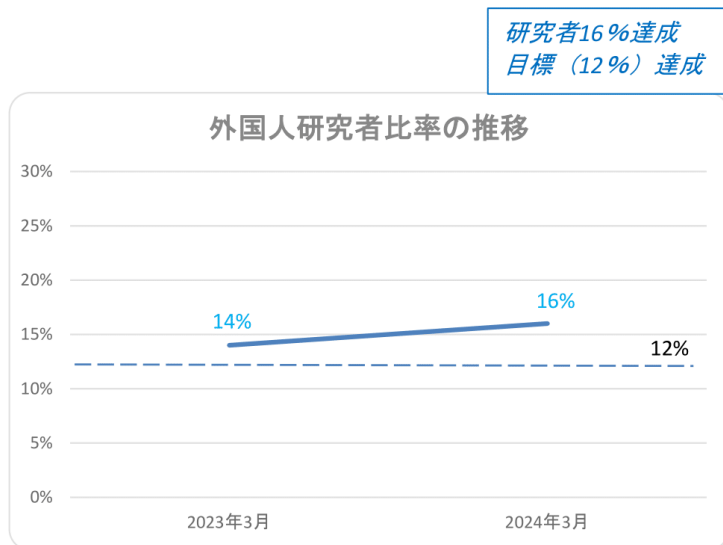
業務委託制度を活用して海外研究者による授業を展開し、教育の国際化を行った。なお、集中講義を行うだけでなく、毎週のリアルタイムの web 授業や、海外の学生との共同授業、あるいは共同研究、さらには国際シンポジウムの開催など、教育、研究における多様性の拡大を継続し、推進した。

2023年度「海外研究者との業務委託契約に関するガイドライン」に基づく業務委託

			*戴伸峰先生以外は全員女性	
申請者専攻分野	委託者氏名	所属	委託業務	
1 心理学	Juthatip Wiwattanapantuwong	チュラロンコン大学(タイ)	1. 「心理学各論I」のリモート授業(後期毎週) 2. 「国際シンポジウムの開催(前期) (国際合同授業の開催も予定するが、委託業務外とする)	
2 日本史	金銀貞	忠南大学(韓国)	1. 国際共同研究の実施 2. 国際シンポジウムの開催(8月末~7月予定) 院生の交流を主な目的とする。	
3 文化人類学	Emmanuelle Gangloff	ナント大学(フランス)	1. 共同研究(後期)	
4 心理学	戴伸峰	国立中正大学(台湾)	1. 毎週木曜日3時間の通常授業 2. 合同授業の実施 3. 国際研究会の開催	

2. 外国人研究者の採用の拡大

正規採用者だけでも 12.2%と、目標値の 12%を達成するとともに、海外業務委託の継続により、さらにその値を超える 15.9%まで伸長させることができた(数値は 2024 年 3 月時点)



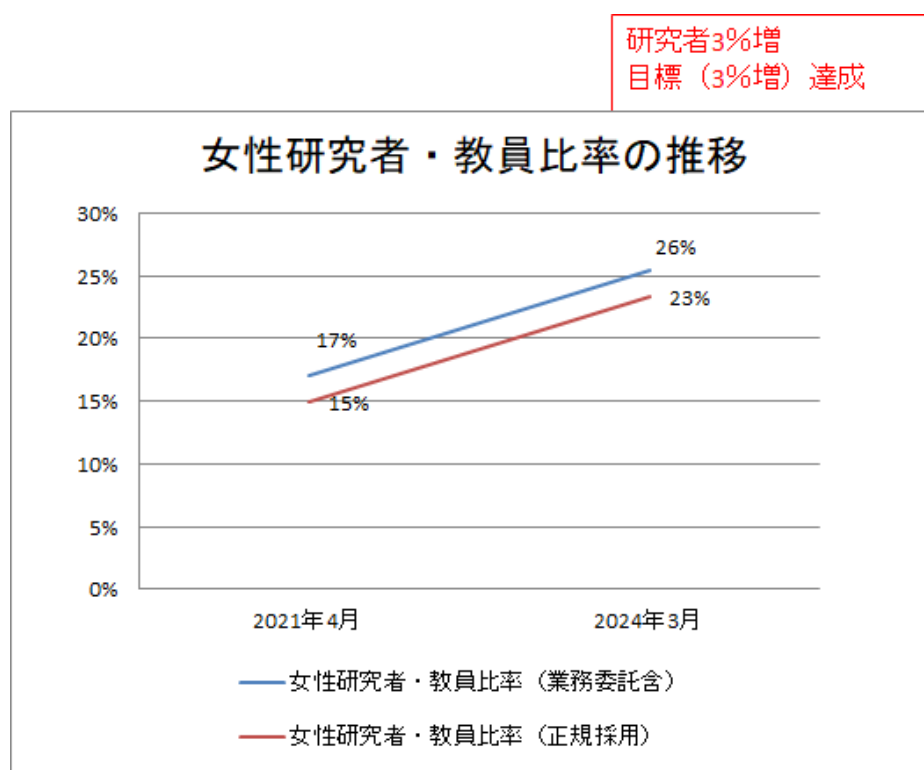
3. クロスアポイントメント制度の積極的な活用による他大学との交流の進展

東北大学とお茶の水女子大学との間で 2020 年 1 月に締結したクロスアポイントメント制度を、2023 年 3 月にも変更協定し、2023 年度も、お茶の水女子大学を本務先とする大森美香教授に、本学にも勤務いただいた(エフォート 10%)。大森先生には、所属する心理学専攻分野・専修の学生の日常の教育指導はもとより、8 月にタイのチュラロンコン大学で開催された、チュラロンコ

ン大学・東北大学共催の心理学の国際学会に、お茶の水女子大学の学生とともに、本学の学生を引率して参加していただいたり、11月に東北大学で開催された全国学会、日本理論心理学会には、研究発表者のお茶の水女子大学の学生といっしょに御参加いただいたりしている。このように、文学研究科では、本学のクロスアポイントメント制度の理念を十全に活かした交流を実現させ、推進している。本学の学生とお茶の水女子大学の学生との交流の進展、さらには、それを基軸にした国内外のさまざまな大学の学生との交流への展開など、このクロスアポイントメント制度の波及効果はきわめて大きい。

IV. 女性研究者の採用の大幅な拡大

正規採用における女性優先採用により、正規雇用の女性研究者(助教以上)比率を23%まで向上させ、目標としていた2021年度比3%増加を大幅に上回る8%増加を達成した。さらに、業務委託およびクロスアポイントメント制度によって女性教員比率を26%まで伸長させた。



[📄 図\(海外業務委託・外国人研究者・女性研究者\) 教育 1_1.png](#), [🖼️ 画像 1.png](#), [🖼️ 画像 2.png](#), [📄 図\(海外業務委託・外国人研究者・女性研究者\) 教育 1_2.png](#), [🖼️ ★女性比率.png](#), [🖼️ 交流会.png](#), [🖼️ 南開大交流会3.jpg](#)

3. 国際・学際的研究展開と文理融合研究の推進

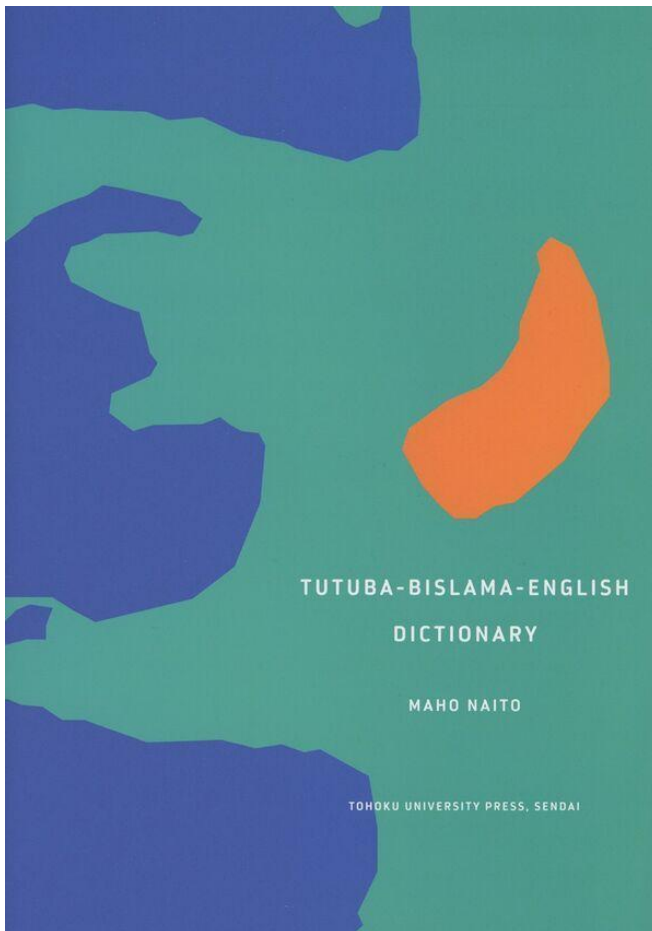
「研究」

No.18 (1)-1 自由な発想に基づく基礎研究の推進および新興・分野融合研究の開拓, No.19 (1)-2 データ駆動型研究とオープンサイエンスの展開, No.20 (2)-1 社会の要請に応える研究の推進

実績報告

I. 多様なメディアでの国際的な研究発信

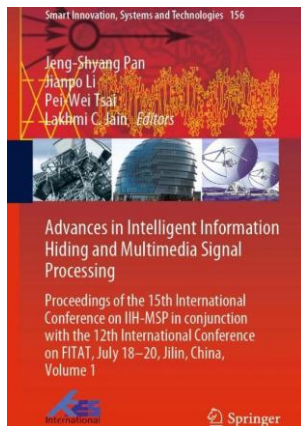
- 内藤真帆准教授は東北大学出版会より Tutuba-Bislama-English Dictionary を刊行した(24年2月)。ヴァヌアツ共和国ツツバ島の言語を、ビスマラ語、英語に変換した言語辞書を世界で初めて刊行し、消滅の危機に瀕した少数言語を体系的に記録した。



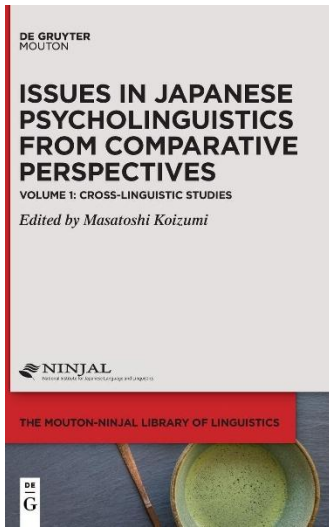
- 横溝博教授は『中世王朝物語の新展望 時代と作品』を編集・刊行し、平安朝以降の王朝物語文学史を新しいパースペクティブのもとで再構成した(23年11月)。
- 堀裕教授は『東アジアの王宮・王都と仏教』を編集・刊行し、六世紀から十一世紀にかけての東アジアにおける王宮と王都の比較宗教史研究を通して、東アジア世界における、それぞれの王権の特色を示した(23年10月)



- 坂井信之教授は Springer から刊行された *Advances in Intelligent Information Hiding and Multimedia Signal Processing* で *Psychoacoustic Study of Japanese Mimetics for Food Textures* を発表し、食感に関する日本語の擬態語について、非日本語話者にも理解できる程度と、その擬態語に含まれる音韻要素と様々な食物の咀嚼音との相関を明らかにした。また NHK 情報バラエティ番組「チョコちゃんに叱られる」に出演し(1月19日放送)、嗅覚に関する謎について認知神経科学の観点から解説した。なおこの番組に関しては、3月1日放送回に川口幸大教授が出演し、中華料理の伝播の変化について解説し、同放送回の「醍醐味」をテーマとするトピックでは西村直子准教授の酸乳製造の研究業績が紹介された。



- 浜田宏教授は代表を務める科研費助成研究(基盤C)の成果を国際査読誌にオープンアクセス論文 *Luck of Outcome in the Talent versus Luck Model*, *Advances in Complex Systems*, Vol. 26, Nos. 4 & 5 (2023) 2350008 および岩波講座社会学第一巻『理論・方法』に「小集団実験による相対的剥奪モデルの検証再考」として刊行した。
- 小泉政利教授は De Gruyter 社より *Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives, Volume 1: Cross-Linguistic Studies* および *Volume 2 Interaction Between Linguistic and Nonlinguistic Factors* を編集・刊行し、30以上の最先端の論文をまとめ、日本の心理言語学の研究成果を世界に向けて発信した。また国際査読誌 *Neurobiology of Language* に *Localizing Syntactic Composition with Left-Corner Recurrent Neural Network Grammars* を刊行した。



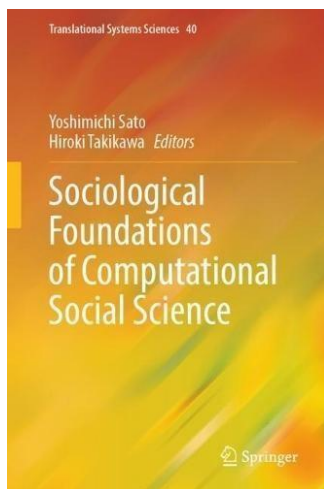
II. 文理融合型研究の推進

- 田代志門准教授は『鎮静と安楽死のグレーゾーンを問う』を編集・刊行し、医学・看護学・生命倫理学・法学の各専門家の思考を整理し、苦痛緩和のための鎮静 (palliative sedation) と安楽死の領域について議論すべき論点をまとめた(23年7月)。また『臨床現場のもやもやを解きほぐす(医学書院)』では緩和ケアの専門医との対話により、臨床の場で生じる問題について緩和ケア・生命倫理・社会学の複合的観点から、患者の抱える問題と医療者による対応について総合的に論じた(23年6月)。
- 青木聡子准教授はシリーズ環境社会学講座第二巻『地域社会はエネルギーとどう向き合ってきたのか(新泉社)』を編集・刊行し、環境や社会の持続可能性を脅かす問題に対して環境社会学の立場から、公正なエネルギーへの転換の可能性について論じた(23年7月)。














計算人文社会学専攻分野では新任外国人教員として呂沢宇准教授を採用した(4月)。呂准教授は AIE 卓越大学院プログラムを修了し、文学研究科で博士号を取得した若手研究者であり、次のような文理融合研究を積極的に推進している。

- 社会科学分野のトップジャーナルである New Media and Society に、ビッグデータと計算的手法を連携する手法による研究成果 Cross-cutting interaction, inter-party hostility, and partisan identity: Analysis of offensive speech in social media を発表した。また The International Conference for Computational Social Science や Annual Meeting of the International Network of Analytical Sociologists などの国際学会で発表を行い、研究の学際化と国際化の向上に努めた。
- 分担執筆者として Springer 社から刊行予定の Sociological Foundations of Computational Social Science および、勁草書房から刊行された『パンデミックと社会科学』に論文を出版し(24年2月)、計算社会科学の理論基盤の構築と社会問題解決への応用に貢献した。
- 科研費 Investigation of Opinion Polarization in Online Communication: Towards an Integration of Explanation and Prediction (代表)と「動的多細胞コミュニティの数理社会解析」(分担)で学際的研究を積極的に推進している。また研究協力者として、「パンデミックに備える社会的データ収集枠組みの構築と数理モデルによるネットワーク介入の有効性評価(さきがけ)」と「脳指標の個人間比較に基づく福祉と主体性の最大化(ムーンショット型研究開発事業)」にも参加し、多様な分野の研究者との共同研究を展開している。



- 災害科学コアリサーチクラスターにおいて木村敏明教授が災害人文学領域長をつとめている他、阿部恒之、谷山洋三、木村敏明がコアメンバーとして参画し理学、工学、医学などとの学際的研究を行っている。木村・谷山は防災科学研究所との人材育成連携事業にも加わり、医療分野との連携で成果をあげている。
(<http://dsmca.irides.tohoku.ac.jp/member>)
- ヨッタインフォマティクス研究センターにおいて坂井信之教授がセンター長を務めている他、木山幸子、鹿又喜隆、原塑、佐倉由泰、小泉政利がメンバーとして参加し文理融合型の ICT 情報科学技術のための研究開発プラットフォームの構築を進めている。

- 10月に設置された言語AI研究センターには、小泉政利、坂井信之、浜田宏がメンバーとして参加し、社会科学への自然言語処理とAI利用の可能性を、言語学、心理学、社会学の分野で検討している。

 [naito.jpg](#),  [chico.jpg](#),  [aoki.jpg](#),  [hamada.png](#),  [hori.jpg](#),  [koizumi.jpg](#),  [roi.jpg](#),  [ro2.png](#),  [sakai.jpg](#),  [tashiro.jpg](#),  [yokomizo.jpg](#)

4. 文化の新たな発展に向けての社会との連携の継続

「社会との共創」

No.06 (2)-4「社会とともにある大学」としての社会連携の強化, No.25 (4)-2 ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンを尊重する「共同参画」体制の構築

実績報告

I. 老いと死という現代社会の課題に取り組むー臨床宗教師養成プログラムの継続ー

文学研究科では、東日本大震災の被災地支援を期するとともに、超高齢多死社会を迎えている現代日本における老いと死をめぐる不安や悲嘆への対応を課題として、2012年以来、臨床宗教師の養成を着実に継続してきた。2023年度も、死生学・実践宗教学専攻分野を中心に、一般社団法人日本臨床宗教師会が認定する臨床宗教師を養成するための履修証明プログラム「臨床宗教教養講座」を開講し、スピリチュアルケア、グリーフケア、死生学、臨床宗教師を実践的な視点から学ぶその1年間のコースを23名が修了した。その修了者は、医師、看護師、保健師、訪問看護師、介護福祉士、カウンセラー、セラピスト、僧侶、牧師、医療・臨床系の大学教員・大学院生等、実に多岐にわたる。2023年度中には、2024年度の「臨床宗教教養講座」の受講生の募集も行い、2023年度を上回る人数の方々の受講を許可した。



II. 公文書の保存・管理を担う専門職員を養成する認証アーキビスト養成コースの継続

文学研究科では、2020 年度に始まった日本の認証アーキビスト制度をふまえ、公文書の保存・管理をめぐる社会の要請に応えるために、2022 年度に、国や自治体が設置する公文書館をはじめとするアーカイブズ(Archives)において働く専門職員であるアーキビスト(Archivist)を養成するコースを創成し、法学研究科、災害科学国際研究所、東北アジア研究センター、史料館の教員の協力も得て、アーキビストに必要な専門的な知識、技能、能力を習得するための授業を開設した。その翌年の 2023 年度も、本コースの授業を着実に開講し、日本の認証アーキビスト制度の内実を支える重要な役割を担っている。コースの登録者も、2023 年度に増加し、修了者は、2022 年度に 7 名、2023 年度は 8 名と着実に推移している。さらに、2023 年度からは、国立公文書館の定めにより、このコースの修了者が准認証アーキビストとして認定されることになった。このように資格としての裏付けが強化されるなかで、本コースの意義はますます大きくなってきており、文学研究科はそうした動向に十分に適応し、そこでの先導的な役割を担っている。

III. 市民の近くで、市民と共に文化を育む催しの継続

1. 「有備館講座」と「齋理蔵の講座」の開催

文学研究科が市民と共に文化を育む講座として開催を重ねてきた「有備館講座」と「齋理蔵の講座」を次のとおり 2023 年度も開催した。本年度は、両講座とも、「境をつくる／境をこえる」という、文化においてきわめて重要な意味を持つ境界に注目したテーマであった。

第 22 期 有備館講座(2023 年度)

会場 大崎市岩出山スコレハウス
主催 東北大学大学院文学研究科／有備館講座実行委員会
協賛 大崎市教育委員会 テーマ 「境をつくる／境をこえる」

第 1 回	5 月 20 日	問芝志保准教授	「宗教と非宗教の境界を再考する」
第 2 回	6 月 17 日	越智郁乃准教授	「琉球／沖縄—海で隔たり海でつながる島嶼部の境界認識」
第 3 回	7 月 15 日	西村直子准教授	「「境」はどのようにつくられ、こえられてきたのか? —古代インドの資料から辿る人類史」
第 4 回	8 月 26 日	土屋育子教授	「“流影 明妃を照らす”—異郷に嫁いだ王昭君」
第 5 回	9 月 16 日	小川和孝准教授	「計量社会学の「境」について考える」

第 16 期 齋理蔵の講座(2023 年度)

会場 伊具郡丸森町 齋理屋敷ほか
主催 東北大学大学院文学研究科
テーマ 「境をつくる／境をこえる」

第 1 回	6 月 3 日	辻本昌弘教授	「アルゼンチン日系人のはなし」
第 2 回	7 月 1 日	内藤真帆准教授	「消滅危機に瀕したヴァヌアツ無文字言語のフィールド調査」
第 3 回	8 月 5 日	田代志門准教授	「生者から死者への移行について」
第 4 回	9 月 2 日	嶋崎啓教授	「日欧の境を超えて—日本とドイツの昔話の接点」
第 5 回	10 月 7 日	柳原敏昭教授	「中世日本の東西南北」

2023年度に、2005年3月に始まった有備館講座は22期目を迎え、2008年9月に始まった齋理蔵の講座は16期目を迎えたが、長年にわたり着実に歴史を重ね、コロナ禍の中でも2020年度以外は開催するなど、文学研究科が、文化の振興、発展に向けて社会との連携を推進する上での確かな要となっている。文学研究科は、2006年3月以来、最新の研究成果を市民の方に向けて発信する重要な刊行物として人文社会科学講演シリーズの出版を重ね、その刊行は既に13巻を数え、多くの読者と好評を得ているが、その内容は、有備館講座と齋理蔵の講座の成果に支えられていることにも、この二つの講座の社会的な意義の大きさが現れている。なお、この人文社会科学講演シリーズについて、2023年度はその第14巻の刊行に向けて、編集を進めた。

2. 東北大学市民オープンキャンパス「紅葉の賀」の開催

2005年以来、毎年11月3日の文化の日に、文学研究科が東北大学植物園と共催している、東北大学市民オープンキャンパス「紅葉の賀」は、2023年に17回目を迎えたが、市民のみならず、にっそう文化に親しみ、楽しんでいただけるよう、さらなる趣向を凝らして開催した。これは、コロナ禍のために、2020年、2021年とこの行事を中止し(ただし、そうした中でも、この両年とも、「紅葉の賀 公開講演会」と題して、市民向けの講演の動画配信を行った)、2022年の第16回も、オンラインによる企画も交えて、以前よりも規模を縮小して実施したことの後を受けて、以前よりいっそう多彩な企画を盛り込んでのことである。第16回にも行った公開講演会、俳句を作るための吟行・投句とその審査・授賞式や、植物園内ガイド付き散策に加え、茶道家による野点を2019年以来復活させ、箏の演奏(邦楽)と、東北大学交響楽団有志による弦楽四重奏(洋楽)とをともに行う形で音楽行事の充実を図り、新規に、草月流のいけばなの展示を催すことで、これまで以上に、約260名の市民の方々に、東北大学と文学研究科・植物園を身近に感じ、楽しんでいただけて、たいへん盛会であり、好評だった。ポツケの森(障がい者就労支援施設)のキッチンカーに出店してもらうという新たな企画も好評であった。

紅葉の賀
東北大学市民オープンキャンパス

TOHOKU 110th
TOHOKU UNIVERSITY

第17回
[注] 東北大学大学院文学研究科・東北大学植物園
東北大学市民オープンキャンパス

2023. 11.3 文化の日
9:00~15:30

午前
9:00~12:30 時行 (自由参加・園内2号まで、2:30後始) 丹野有美先生 (早稲田大学)・佐藤敏先生 (早稲田大学)
10:00~10:20 オープニング・セレモニー
10:20~13:00 野点
10:20~10:50 弦楽四重奏
11:00~12:10 植物園内ガイド付き散策

午後
14:30~15:30 ポツケの森 (障がい者就労支援施設) キッチンカー出店
13:30~14:50 公開講演会
14:50~15:30 俳句授賞式・講評

開催場所
オンラインフォームで申し込みください。
[申し込み] <https://forms.gle/4d7v38k9u277188>
[問い合わせ] 文学研究科 紅葉の賀 事務局 (後援: 文学研究科)

2023年度
1. 講演会 (13:30~14:50) 小澤有美先生 (東北大学文学研究科) 『東北方言「七」の語彙への視』
2. 野点 (10:20~13:00) 丹野有美先生 (早稲田大学)・佐藤敏先生 (早稲田大学)
3. 弦楽四重奏 (10:20~10:50) 東北大学交響楽団 (大平 聡 団長) 文学研究科後援
4. 授賞式・講評 (14:50~15:30) 文学研究科後援
5. キッチンカー出店 (14:30~15:30) ポツケの森 (障がい者就労支援施設) 後援: 文学研究科・東北大学文学研究科



3. 「メロでカルチャー」の開催

文学研究科では、川内キャンパスが地下鉄東西線の開業によって利便性の増したのを機に、本キャンパスを会場として、2015年度から、市民向けの公開講座「メロでカルチャー」を開催している。ただ、2019年3月に第4回を開催して以来、コロナ禍により中止となっていたが、2024年3月9日に、第5回メロでカルチャーを開催した。今回のテーマは「美術の向こうに見えるもの」。次のような、日本の美術史についての二つの魅力ある講演によって、「メロでカルチャー」を再開させ、さらなる継続と発展に向けて重要な一歩を踏み出すことができた。その重要な第一歩を刻むにふさわしく、用意していた会場が満席に近くなるほどの約110名の市民の方にお出でいただき、たいへんな盛会であった。

杉本欣久准教授「京都の災害と絵画－龍に込められた思い」

長岡龍作教授「仏教美術のひみつ－見える世界に隠されているもの」



IV. 全学や地域の催しの企画・運営への積極的な参画

1. 東北大学女子大生誕生 110 周年・文系女子大生誕生 100 周年記念事業の文学研究科の特設ウェブサイトの開設

文学研究科は、東北大学女子大生誕生 110 周年・文系女子大生誕生 100 周年記念事業の特設ウェブサイトを開設して、閲覧者を、全学の催しや東北大学基金、東北大学ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン(DEI)推進宣言等のウェブサイトへと導くとともに、文学研究科独自の記念特設ページを作成した。

2. ミモザウエイズ 1910-2020 ジェンダー平等 x 演劇「100 年の日本の女性史を振り返る、初めての演劇」の後援

文学研究科は、日仏女性の人権架け橋 ミモザ実行委員会と東北大学ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン推進センターとが共催開催した、ミモザウエイズ 1910-2020 ジェンダー平等 x 演劇「100 年の日本の女性史を振り返る、初めての演劇」を後援して、11 月 8 日のコミュニケーションワークショップ、12 月 16 日の参加型リーディングの開催などを支援した。

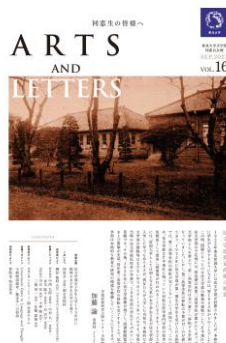
3. 学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ 2023 への参加と受賞

文学研究科の言語学研究室が「声から見ることばの科学 耳と目で確かめてみよう」というテーマで、7 月 16 日に開催された学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ 2023 に参加し、自分の音声を図(波形、スペクトログラム)にして、その特徴を観察する機会を、小学生からおとなまでを対象とする市民のみなさんに提供するとともに、「文理の垣根を取りま賞」を受賞した。

V. 同窓生との連携、交流の継続

文学研究科は、同窓生との連携、交流を重視して、文学部同窓会の会報『ARTS AND LETTERS』を毎年発行し、文学部同窓会の総会・懇親会を隔年で開催している。2023 年度は、東北大学ホームカミングデーに合わせ、9 月 30 日の夕方に総会・懇親会を開催するとともに、『ARTS AND LETTERS』第 16 号を 9 月付で発行した。この『ARTS AND LETTERS』第 16 号は、東北大学女子大生誕生 110 周年・文系女子大生誕生 100 周年を記念する特集も組んだが、例年とほぼ同じく、8000 部を刊行し、約 7800 部を文学部の同窓生、教員、学生に届けた。

また、全学の同窓会、萩友会での連携、交流もたいせつにしており、2023 年度中には、東北大学インドネシア同窓会会長のアルディアンサー氏が来訪され、研究科長とも懇談を行っている。



[img231103_3444.jpg](#), [img231103_3467.jpg](#), [img231103_3720.jpg](#), [img231103_3474.jpg](#), [web用 メトロでカルチャーチラシ 0130 \(1\)-1.png](#), [スクーリング 20230828.jpg](#), [image0.jpeg](#), [image1.jpeg](#), [東北大学文学部同窓会報 16\(表紙\)-1.png](#), [20240220 スクーリング \(1\).jpeg](#), [図表\(有備館・斎理蔵\)-2.jpg](#), [P1000150.JPG](#), [★紅葉の賀 2023 掲示.png](#), [紅葉の賀いけばな.JPG](#)

5. 教授会の DX 化と大学院入試方式および時期の見直し

「教員の研究時間確保」

No.46 (1)-2 全学 DX によるデジタル・キャンパスの推進, No.09 (1)-2 エビデンスに裏付けられた新たなアドミッションの展開

実績報告

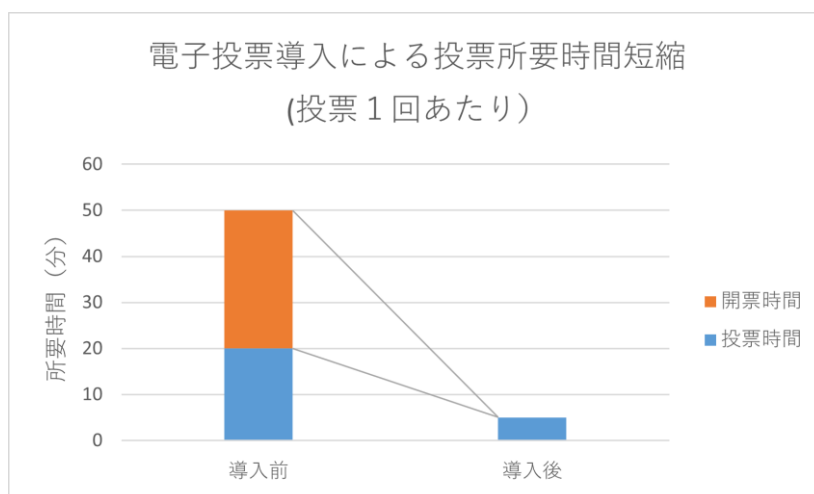
1. DX 化による教授会等会議時間の短縮

1. 電子投票の導入

文学研究科では、2023 年度の研究科委員会・教授会から本格的に電子投票を導入し、1回の投票について準備と投票時間を合わせおよそ 45 分の時間短縮をおこない、年間で1名あたり 24 時間程度(研究科全体:24時間×72名=1728時間)の研究時間確保を実現した。

これまで文学研究科では、研究科委員会・教授会の投票による議決事項については、紙などを用いた投票によってきた。また COVID-19 感染症拡大によって 2020 年度から会議を原則オンライン化した後も、匿名性確保への懸念などから同様の方式を継続してきた。しかし紙による投票のためには1回の投票につき投票時間に 20 分、開票時間に 30 分を要する他、会場準備、用紙の印刷などにも多くの教職員の時間と労力が投入されてきた。

そこで文学研究科では 2023 年度研究科委員会・教授会から Google Form を用いた電子投票を本格導入するとともに、更に手順の見直しにより投票にかかる時間を 2-5 分程度(開票作業はほぼ 0 分)と前年に比べ1回あたり45分程度短縮し、年間で32回の投票が行われたことからトータルで 24 時間程度の会議時間短縮を実現した。



また、研究科委員会・教授会において、一部の議題については説明を書き込んだ事前配布資料を用いた「メール審議」方式を用いることで、丁寧な説明と審議時間の短縮の両立を図っている。更に、2023年度は研究科委員会・教授会および運営会議を原則オンラインで開催し、参加者の移動時間や出張等研究活動への制約を無くすようにした。研究科委員会・教授会については様々な弊害も生じたため来年度から対面に移行するが、運営会議については今後も原則オンラインで開催する予定である。

2. 教授会運営のDX化

電子投票以外にも、Google Driveで下の議題依頼フォーム(下図)を共有し議題の整理を行うことで、従来教授会開催前に運営会議メンバー全員で行っていた議題整理会議を廃止し、少人数での打ち合わせに変えた。これにより3名の運営会議メンバーが年間11回(1回2時間程度)の会議から解放され22時間程度の研究時間確保を実現することができた。

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
2023年度 第14回	運営会議・議題依頼書 1月11日											
議題区分	議題名/議題整理表/注記コメント	運営会議説明者	運営会議限り	審議事項	審議事項	その他	審議事項	審議事項	その他	資料の有無	備考	議題提出者 研究科長
(プルダウンで指定)	教授会・研究科委員会の議題整理表/注記コメントを運営記載	適宜記載	限	メール報告・メール審議は「○」	議題依頼書・議題依頼書「○」	要検討は「？」				有無	事務から室長等への連絡事項	
	(議題) (注記コメント欄)	研究科長										
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											
	(議題) (注記コメント欄)											

文学研究科では7月20日に伊藤彰則工学研究科長に依頼して生成AIについての教育FDを行い、研究科における研究、教育、運営への活用に向け基本的な情報や意義を教員間で共有した。

II. 大学院入学試験の科目、時期に関する見直し

文学研究科では大学院入学試験の科目の整理を行うことで効率化を図り、入試業務の負担軽減と確実性向上を両立させる改革を行い、本年度それを実施した。また入学試験時期の見直しと会議の時期の工夫によって9月をひと月まるごと研究に専念できる期間として確保し、長期にわたる実験や調査を中断することなく実施できるようになった。

これまで文学研究科の前期課程一般の入試科目は、共通の外国語(120分)のほかに専門分野ごとの専門科目Ⅰ(120分)と専門科目Ⅱ(任意・18/26専攻分野が実施)および面接となっていた。その中で専門科目Ⅱは実施する専攻分野としない分野があり、外国語と重複する内容も多か

ったため、効率面のみならずミスを防ぐ上でも問題が多かった。そこで文学研究科では2023年度から、専門科目ⅡをⅠに統合し、原則的に外国語(120分)と専門科目(120分)と面接に整理した。その上で研究分野の特性にも配慮し、どうしても必要な専攻分野(7/26専攻分野)にのみ、特別科目として史料読解や第二外国語などの試験を課すことを認めた。

2022年度大学院入学試験(前期課程一般)



2023年度大学院入学試験(前期課程一般)



さらに入試の日程にも工夫を加え、それまで別日に実施していた一般選抜と社会人選抜入試の専門試験を同日に行うことで、両選抜で同一試験問題が使用できるようにした。これにより作題、印刷、採点の作業量が軽減されるとともに、作業の簡素化によりミスが発生する危険性を減らすことができた。

また文学研究科ではこれまで9月と1月の下旬に実施していた大学院入学試験について、それぞれ8月と2月の月上旬に行うこととし、今年度それを実施した。さらに入試準備や判定会議の時期に工夫を加えることで、9月をまるごとひと月研究に専念できる期間とした。



[★電子投票による時間短縮.png](#),
 [議題依頼書.png](#),
 [★大学院入試科目.png](#),
 [★会議日程.png](#)